

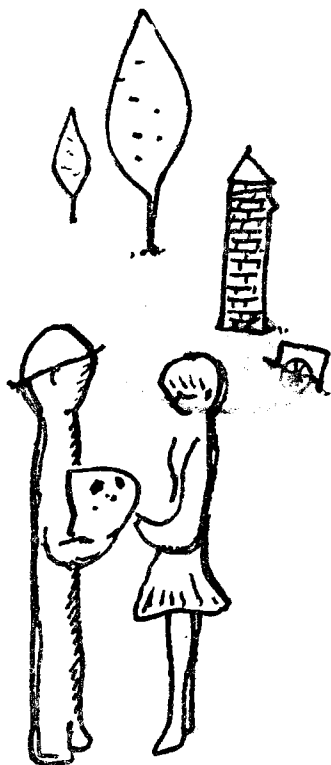
こぶしの花の咲くころ

畔柳 二美



こぶしの花の咲くころ

畔 柳 二 美





KODANSHA

こぶし^{はな}の花の咲く^さころ

(文学)

¥ 150

昭和 33 年 6 月 25 日 第 1 刷発行

昭和 37 年 6 月 25 日 第 13 刷発行

著 者 小 柳 二 美

発行者 野 間 省 一

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町 3 / 19

振替 東京 3 9 3 0

電話大塚(941)大代表 3 1 1 1

© 小柳二美一九五六

(落丁本・乱丁本はお取りかえいたします)

(製本大製)

こぶしの花の咲くころ

畔柳 二美





此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertong.com



KODANSHA

こぶしの^{はな}花の^さ咲くころ

(文学)

辛 150

昭和 33 年 6 月 25 日 第 1 刷発行

昭和 37 年 6 月 25 日 第 13 刷発行

著 者 畔 柳 二 美

発行者 野 間 省 一

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町 3 / 19

振替 東京 3 9 3 0

電話大塚(941)大代表 3 1 1 1

©畔柳二美一九五六

(落丁本・乱丁本はお取りかえいたします)

(製本大製)

こぶしの花の咲くころ

畔 柳 二 美

こぶしの花の咲くころ

指 先

北海道の山の中の発電所にも、漸く春風が吹きはじめた。山も川も木も草も、終日、暖かい陽をうけて、ゆら、ゆら、ゆらゆら、かげろうに燃えてゆれている。

「僕、恥ずかしくて、恥ずかしくて、全く、どうかと思ってしまうよ」

学校から帰るなり、弟の弘は口をとがらせて、ぶんぶんだ。彼は靴をぬぐうともしない。「何です。帰ってくるなり、行儀の悪い」

台所で忙しそうに働きながら、母は玄關の弘に声をかける。

「全く、話にならないんだよ。みんな、僕をみるんだよ」

母の傍で、お茶碗やお皿の整理をしていた俊子が、とうとうしびれをきらせて玄關へ顔をだした。

「何が恥ずかしいの弘ちゃん。中学生のくせに、大人みたいなこと云うもんじゃないよ」

だが、弘はぶんぶん。手をふりあげたり、足ぶみしたり、その上、帽子を両手にまるめての騒動なのだ。

「弘ちゃん」

俊子は、ぐんと胸を反らせ、腰に両手を当てて、弟を睨みつけた。

「おめくのはお止し。今日は家じゅう、みんなが忙しいってこと、あんた知ってるじゃないの。」

外でも掃いて手伝いなさい」

「いやだよ。絶対、ごめんだよ」

俊子はおどろいて、目を白黒させている。いつもは内気で無口でおとなしい性質の弘なのだが、今日の風向が違いすぎるからだ。

「母さあん。きてよ。弘ちゃん、どうかしてしまっただよ」

俊子の悲鳴に、母は、ぬれ手をふきふきやってきた。

「弘ちゃん、いいかげんにしなさい」

弘は、その母をみあげて目を据えた。

「母さん。僕、今夜、家でごはんを喰べないよ」

「……………」

「誰が、何と云ってもごめんだ。……ともだちは、みんな僕の顔をみて、首を縮めたり、舌をだしたり。……あんな恰好しているの、みんなが僕をひやかすんだよ」

母と俊子は、目をみあわせて首をかしげる。二人とも、不安そうなまばたきが続いた。だが母はやはり我子の性格を冷静にみつめる心を持っている。母は急に笑顔にかわった。

「弘ちゃん」

母の静かな声が続く。

「どうして、みんながあんたの顔みただの。そのわけを話してごらん」

「それはね」

弘は、急に目を大きく見開いた。

「みんなで汽車に乗ったんだよ」

弘は、隣の中学校へ汽車で通学しているのだ。

「すると、僕たちの乗った客車に、大きい姉さんが乗っていて……」

「まあ——。姉さんたち、弘ちゃんと同じ汽車だったの。たいへんだあ」

俊子が、とんきょうな声をあげた。今日は、姉の圭子の里帰りだからだ。圭子が町へお嫁入りをして丁度ふた月。予定は時刻この村に着く次の汽車の筈だったのだ。

「ひと汽車早くきてしまったのね。母さんどうしよう。たいへんだあ」

母は、無言で、まばたきばかり。すると弘の聲が、急に勢いづいて高調子になった。

「がっかりだよ。大きい姉さん、全く、がっかりさせるよ。……顔におしろいをつけて、なんべんも、鏡をのぞいて口紅をつけて。……そして、そして兄さんと二人で並んで腰かけて。……それから……二人で、手をつないだんだよ母さん」

そこで、中学三年生の弘の頬が、金時さんのように真っ赤にかわってしまった。

「何云ってるの、ばかばかしい」

俊子の声だ。彼女の顔は斜めにゆがんで口はへ字にひんまがっている。

「あたりまえじゃないの。姉さんは結婚しているのよ。……このごろの中学生って、ほんとに生意気ね」

母は二人をみくらべて微笑笑。だが、ぐずぐずしてはいられない。あわてて台所へ引きかえ

すと、忙しそうに働きたした。

それから十五分後、賑やかな笑声と共に、圭子夫妻がこの家に到着した。母はまごまごしながら、むやみやたらにお辞儀の連続。

「ようこそ、おいで下さいました。お迎えにも参りませんでほんとに、ほんとに」

「いいえ、母さん、それどころではございません。ご迷惑をおかけしてはと思ひまして、わざわざ、ひと汽車早く参りました」

背の高い佐山氏は、妻の圭子のうしろで、その度に頭を下げる。

俊子も、弘も、小さい弟の登も、びっくり仰天だ。わずか二ヵ月のあいだに、大きい姉さんの圭子がすっかり他人になってしまったからだ。その上、何と都会風な容姿だろう。

「さあさ、あなたたち、お兄さんやお姉さんに早くご挨拶をなさい」

三人は、大急ぎで頭を下げる。

「みんな、お手紙ありがとう。元気そうで何よりだわ」

「……………」

「……………」

「……………」

続いて、佐山氏のはぎれのよい言葉。

「俊子さん。度々お手紙ありがとう。弘君も、登君も、ずいぶん立派な体格ですね。今度、是非、みんなで町へ遊びにいらして下さい」

「ハイ」

「ハイ」

「ハイ」

いずれも顔を真っ赤に染めて、蚊の鳴くような声ばかり。

すると、そのうち、夫の佐山氏の方をひょいとむいて、圭子がやさしい声で云った。

「ね、あなた」

「なあに、圭子さん」

とたんに、弘がすっと立ちあがって外へ飛びだした。次に俊子は台所へ駆けこみ、小さい弟の登だけが、きょとんとした顔つきで二人を見守っている。

「ご近所のご挨拶まわりはどうでしょう」

「それは父さんがお帰りになられてからのほうが、いいでしょう」

「でも、父さんは今日、五時にならなければお帰りにならないそうですわ」

結局、二人は母の言葉で、早々近所へ挨拶まわりにゆくことに決定した。土産ものをそれぞれ片手にかかえた若夫婦は肩をならべて玄関へでる。俊子は、あわてて飛びだすと、二人のうしろから声をかけた。

「いってらっしゃい」

だが次の瞬間、彼女は目をかあっと見開いて、そこに棒立ちなのだ。姉の圭子の右手の指先と、その夫の佐山氏の左手の指先が、からみあったまま外へでていったからだ。

俊子の目が、ぐるぐるまわる。頭のとっぺんから足先まで一万ボルトの電流が突っ走ったような顔なのだ。おどろいたのだ。彼女は、小説も読むし、映画も大好き。その上圭子が佐山夫人であることを、百も承知で幸せを日夜祈りつづけているのだ。圭子の指先が、夫の佐山氏とふれあうことは幸福の象徴でなくて何であらう。

それなのに俊子は、姉の圭子は既に、彼女たちの知らぬ遠い遠い場所にいることを、実感として、今はじめて理解したのだ。

「ねえ、俊ちゃん」

その夜、夕食のあとで、圭子が妹にささやいた。

「私、とても、幸せよ」

「そ、そう。わかってるわ」

「立派な人よ。うちの佐山は」

「立、立派だわ」

「お姑さんも、とても、優しい方だわ」

「よかったわね」

「町の生活は、この山の中の発電所とちがってめまぐるしいけれど、佐山は優しくて、立派で、人格者で、それに、とても私を愛しているのよ。私、本当に幸せだわ」

「よかったわね、姉さん」

「佐山はねえ、とても愉快的性格なの。いつも、明るい笑い声が絶えないわ」

「……………」

「佐山はねえ、俊ちゃん。佐山はねえ……」

「うん」

「佐山はねえ、あのう、佐山はねえ」

圭子は、新婚二ヵ月の話を、どこから始めようかと、混乱状態。隣室では、その夫の佐山氏が、姉妹の父母と声高らかに談笑中なのだ。

所で俊子だ。彼女は次第に頬をゆがめてゆく。

「あのね、俊ちゃん。それでね、佐山はね」

「姉さん。一寸、まって」

圭子はびっくり。妹のひきつったような顔をしげしげみまわした。

「姉さんの結婚が、幸せだったこと、私ともううれしいの。でも、家では、淋しかったわ……漸くこのごろ馴れたけれど……」

圭子は一瞬、はっとしたように息を呑んだ。だが、彼女はすぐに笑顔に返った。

「よく解るわ。でも、女は、いつまでも家にいられるわけのものじゃないのよ」

「そりゃ、決まっているわよ。男だって女だって、子供はいつまでも家にいられやしない」

俊子はそして、口の中でつぶやいた。

「でも、どうして、姉弟の愛情や、いたわりあいを忘れていいと云える」

新婚二ヵ月めの圭子の耳には、妹のつぶやきなど受けいれるすきまのあろう筈がない。彼女